の香りを吸いこんだ。女の身体の動きは自然だったし、口をはさむ暇もなく、ただ、じっと手の甲に吸いついている唇の感触を感じていた。少年の頃の記憶が、何枚かの絵画になって現れた。誰かに、傷口から血を吸ってもらった絵画、犬や猫たちが自分の舌で傷口を舐めている絵画。手の甲に舌の忘れられていた記憶が甦った。不思議な力だ。唾液でつるつる滑る手の甲に、過去の時間がせりだしてきて、ぴちぴちと反ね、強力な磁石で誘き合うかのように、〈現在〉と戯れている。触手に似た、やわらかい、あたたかみをもった舌が、X氏を刺激している。背中を快感が走った。妙に、心がやさしくなった。幾度か息をつぎ、ていねいに、ゆっくりと、大切なものを扱うかのように、舌はX氏を捉えて離さなかった。X氏は、黙って、1本の棒になっていた。深く、成熟した、女の中心に身を横たえている充実した気分が、X氏を安心させた。X氏は、黒い頭を見おろしながら、今日は、実に、妙な日だと苦笑した。

黒く大きな光る眼が正面からX氏を覗き込み、不可思議な笑みを浮かべ、明確な口調で言い放った。

——犬の歯形なら、こんな傷はつかないわ

——どうも

——私の検査の結果では、人間だわね

——失礼、人間という犬でした

——おだやかじゃないわね

——まったく、妙な話で

——なぜかしら

——なぜって、相手に訊いてほしいくらい。雨のせいかもしれない

——そういう類の話みたいね

——大丈夫かな？

——傷のこと？　なら心配ないわ。もうひとつの方はどうかしら

——もうひとつって？

——だから、理由もなく、手を噛むなんて

——限度というものがないんだね、きっと。うんざりするけど

——人間のこと？　それとも雨のこと？

——どこにも中心がないみたいで

——どこもが中心だからじゃないの

X氏の心が微かに傾いた。仕事以外のことを女が訊いたためだろうか、声がふくらみをもち、制服から輪郭がはみだしたような気がする。意識が泡立った。いや、澄んでいるのか、混って膨張しているのか、まてよ、いつか、似たような会話を誰かと交わしたことがある。わからない。いった